

嫉妬と羨望：W. G. Parrott の類型学をめぐって

——嫉妬と羨望の心理学（1）——

中 里 浩 明

Summary

On W. G. Parrott's Typology of Jealousy and Envy

Hiroaki Nakazato

Recently jealousy and envy as social emotions are discussed with more eagerness, both theoretically and empirically. The article of W. G. Parrott (1991) is one of them. Typically, Envy is said to be experienced as feelings of inferiority, longing, or ill will toward the envied person. Jealousy, on the other hand, may occur when a person either fears losing ("suspicious jealousy") or has already lost ("fait accompli jealousy") an important relationship with another person to a rival. And the major feelings are fear of loss, anger over betrayal, and insecurity. These two emotions are distinguished definitely as such, but in real life are confused because of the wide meanings of jealousy. Around this writing some considerations are suggested.

それにしても、どうして人びとは小野小町を、こうまで残酷な運命に陥れずにいられなかったのだろう。数々の書物に語りつたえられている伝説は、小町を野辺に打ち捨てられて成仏もできぬ觸體にまでつき落とし、しかもその眼窩から薄が生い出でて、秋風が吹くたびに眼をえぐるという刑にまで処しているのだ。

森本哲郎「嫉妬について——小野小町」(1989)

1. 序論

嫉妬と羨望という、古典的な主題が、改めて、研究者の注目を浴びてきている。嫉妬もしくは羨望と題して、近年、欧米で出版された、心理学関係の書物は、筆者の識る限りにおいても、片手に余る (Bernhard, 1986; Clanton & Smith, 1977a; Cohen, 1986; Friday, 1986; Salovey, 1991a; White & Mullen, 1989)。ましてや、論文の数たるや、枚挙に遑がない (e. g., Bringle & Buunk, 1985; Salovey & Rodin, 1989)。社会学関係の書物は、寡聞に過ぎる (e. g., Girard, 1961; Schoeck, 1969)。

わが国においては、いかがであろうか。広く、行動科学の諸領域を管見するものもおこがましいが、さほど多いとも思われない。該書が、数冊、散見されるに留まっているのではないか (岸田, 1987; 荻野, 1983; 詫摩, 1975)。そうだとすれば、雑誌『思想の科学』の特集「羨望と嫉妬の研究」(1991, 5) は、論文、エッセー、座談を9篇収載し、光芒を放っている。

ところで、筆者は、以前、共同研究「対人態度の感情構造に関する研究」(中里・田中, 1973) を著し、「我々は、現実の社会生活のなかに位置する人間のなまのどろどろした心理を、対人態度の感情構造という視角から解明を試みたのであるが、実際のところ、模索の第一歩を踏みだしたというのが正直な感慨である」(p. 96)、と結語したまま、約20年間、主題に関しては沈黙してきた。他の問題にかまけてきたことや、適切な書物に遭遇しなかったこともあるが、なによりも、方法論上の困難に妨げられて、懈怠の心に身を委ね、腕を拱き、調査研究を断念してきたというのが、実感である。だが、この時に至り、主として、欧米の、質の優れた心理学文献の助けを藉りて、また、鼓舞され、嫉妬と羨望を始め、社会的感情に関する一連の研究を再開する機会に恵まれ、これを継続中である。序説として、ここに、一篇を提示する。

本論攷は、嫉妬と羨望の心理学に関する、最近の知見の在処や到達点の一端を理解することを目的としている。そこで、サロヴェイ編集の『嫉妬と羨望の心理学』(Salovey, 1991a) の巻頭を飾っている、パロット (Parrott, W. G.) の論文「羨望と嫉妬の感情経験 (The emotional experiences of envy and jealousy)」を、基本テキストとし、その概要を適記するとともに、若干の論評を加えたいと思う。

さて、著者パロット (W. Gerrod Parrott) の紹介から入るのが筋である。彼は、1985年に、University of Pennsylvania から Ph. D. を受領し、現在、Georgetown University の心理学助教授の席を占め、社会的感情の認知的分析を主たる関心領域とする研究者の一人である。これまでの論文を眺めると、調査研究もさりながら、理論的な考察にも長じているところから、

劈頭をなす第一章の執筆も委ねられたのであろう。編者のサロヴェイ (Peter Salovey)、彼もまた、少壮気鋭であるが、当該論文を評して、その嫉妬と羨望に関する明確な区別立ては、編書の他の分析にとっても有益だ、と述べている。

著者の理論的考察は、スミス (Richard H. Smith) との共同の調査研究データに基礎を置いている。データは、羨望や嫉妬の現実経験に関する一人称記述と共に、尺度評定を求めて得られたものである。両者とも、羨望という概念の、社会における重要性を復権し、強調する立場に立っている。

羨望と嫉妬の経験の仕方を説明し提示することを、この考察は、主要な課題としている。羨望や嫉妬は、幾つかの形態をとって生起し、当該感情を持つ人物を仔細に調べたり、注意を向けることによって、始めて、区別し得るものである。羨望や嫉妬には、生起する条件や経験の仕方に、数多くの変異があり、重要な特殊型 (subtypes) を認めなければならない。しかも、悲しみや恐れと違って、羨望や嫉妬は、感情 (emotion) の理論の用語で、未だ、詳しく書きとどめられていないのである。そこで、その論及に先立ち、感情、感情と意識経験の関係、感情的フィーリング (emotional feelings) の源泉、に関する概念上の争点が、まず、説明されなければならない。

2. 感情と感情経験

「感情挿話」 (emotional episode) という概念を、著者は提起する。感情に纏わる出来事の物語であり、人間の感情を理解するための、自然の、分析の単位である。即ち、羨望や嫉妬の現実経験を記述するように求められたとき、人が、差し出す物語のことだ。これには、一つの感情もしくは一連の感情を導くに至る情況、感情そのもの、生起への自己規制や対処の試み、後続する出来事や行為、解決ないし現状、が含まれる。そして、この感情挿話の抽象として、評価、基本的感情、フィーリング、対処、表示規則、認知に及ぼす気分の効果、文化規範といった、感情理論の概念が産出されるのである。

伝統的に、羨望や嫉妬概念は、当該人物の信念、動機、感情反応を含み、しかも、こういった諸反応を惹起する状況と併せて定義づけられてきた。羨望が生じると言われるのは、人が、他者の持っているものを欠いている場合、それを持つことを望むか、または、他者がそれを持たなかったことを願うときである。そこでは、他者の優れた資質や業績や所有物が、自己の上に、暗い影を投げかけるものとして知覚される。だから、羨望は、劣等感情、切望、羨ましい人物に対する悪意、として、典型的に経験されるのである (Neu, 1980; Salovey & Rodin, 1984)。

これに対して、嫉妬が生じると言われるのは、ライバルのせいで、他者との重要な関係を失うことを惧れるか、既に失った場合である。嫉妬も、様々な形態を取り、経験されるが、しかし、典型的には、喪失の恐れ、裏切りへの怒り、不安、を含んでいる (Hupka, 1984; Mathes, Adams, & Davies, 1985)。

なお、羨望と嫉妬、いずれであれ、人の経験する感情は、当該人物の行う認知的評価、注意

を集中する評価の局面、によって定まるとされる。ただ、こうした前提は、なにも著者だけにとどまらず、感情への認知的接近にとっては、共通の認識でもある (e. g., Frijda, 1987; Ortony, Clore, & Collins, 1988)。

さて、感情 (emotion) は、単に、フィーリングまたは意識経験ではない。感情の概念には、既に示唆したごとく、経験に加えるに、例えば、認知的評価 (cognitive appraisals), 社会的規準 (social conventions), 生理反応, といった他の要素が含まれる。これらの要素は、意識経験に寄与するとしても、概念上、区別される。また、羨望しているとも、嫉妬しているとも、自身、思ってもいない他者に、観察者が、そのように、属性を付与する場合もある。このように、両概念は異なる。しかしながら、なんらかの意識経験やフィーリングを持つことは、人が、ある感情を持つと言われるとき、意味する内容の一部であることがよくあり、従って、羨望や嫉妬のフィーリングを持つと述べても、道理に叶っているであろう。それ故、こういった、感情経験の類型学が提起される。

この感情経験やフィーリングは、確かに、身体の変化とか、脳の未分化な、非認知的領域が活性化することから、一部、生起する。しかし、感情的フィーリングには、別の源泉もある。即ち、高次の認知的活動、例えば、状況をどのように解釈するか、状況のどの局面に注意を向けるか、状況をどのように評価するか、自分が下した評価にどのように反応するか、それに、疑惑、慌ただしい思考、などからも生じるはずだ。感情経験は、この種の認知活動と、分かちがたく結びついている。従って、羨望や嫉妬の感情経験にも、これらの認知的要素は、当然のこと、寄与し得るのである。

ところで、羨望や嫉妬のいずれも、当該人物は、行為の動機がそこにあるとは、最後まで気づかないことがある。かくて、実感していなくとも、羨望や嫉妬により、その行動が、動機づけられていると、他者から解釈される場合に、羨望しているとか嫉妬していると言われる。

3. 羨望

羨望の核心には、社会的比較 (social comparison) がある。他者との比較から、我々は、自己概念の重要な部分を形成する。能力、業績、所有物が、他者より劣弱だと、自尊心 (self-esteem) や世間向けの顔 (public stature) の減少する可能性があり、これは、羨望へと通じ得る (Salovey & Rothman, 1991)。また、社会的比較を通して、自分の剥奪 (不満) の意識が高められ、羨望がかき立てられる。自分の苦悩を、皆は味わっていないことを明瞭に知り、羨望がいやますのである。

しかし、そうだからといって、否定的な社会的比較の全てが、羨望へと通じるわけではない。羨望は、我々の同輩者に主として向けられる。自己呈示のためである (Silver & Sabini, 1978)。身近な他者の成功と自分の失敗との落差が、自らの欠点を証明したり、そこに注意を集中させたりするとき、始めて、羨望が結果する。言い換えれば、関連ある事柄で、比較可能な人物との落差が、ほかでもなく、我々の劣等性が原因なのだということを、強く証拠立てるのである。

人生に不公平は、つきものである。そうだとすれば、羨望を助長するような状況は、ごくありふれたものだから、羨望は、至るところに存在するし、影響力を潜在的に持っている。

これと並んで、羨望の発生に、性格 (personality variables) もまた、関連を持つ。羨望の抱きやすさの個人差であるが、さほど、解明されているとはいえない。

さて、羨望の全てがすべて、否定的なわけではない。羨望経験は、多様であるが、まず、悪意のある羨望と悪意のない羨望、の区別立てが導入される。また、対抗心 (張り合うこと) が指摘されたり、憧れる羨望と悪意のある羨望に、分類されていることもある (e. g., Neu, 1980)。いずれにしろ、道徳的に受容される羨望と、非難されるべき羨望との二分割である。

悪意のない羨望の焦点は、「あなたが持っているものを、私も持ちたい。」(I wish I had what you have.) にある。この種の羨望を、羨望概念に含めない研究者も認められるが、日常生活で、人々は、これをも含めて、羨望と呼んでいる。例えば、羨望対象への劣等感、他者の所有物への切望と断念、自分を向上させようとの決意、羨ましい人物への憧憬、などとして経験される。

これに対して、悪意のある羨望の焦点は、「あなたがしていることを、私はさせたくない。」(I wish you did not have what you do.) にある。羨望する対象や資質を取り去りたい、壊したい、ということだ。豪華車の盗難、高潔な人物の墮落、美顔の損傷、などが望まれる。

この、悪意のある羨望が、本来の羨望と言える。他者が持っているものは、必ずしも所望されない。取り去られることだけが、望みである。そこには、他者が、自分の劣等性の、従って、自分の不幸の、なんらかの原因だとの妄想が含まれている (Smith, 1991)。だから、当人にとっては、不公平に対する怒りや憤慨として経験され、羨ましい人物への憎しみに転化するまで一般化される。

そうしてみると、悪意のある羨望と怒りとの間には、表面上、強い類似が認めらる。両者の区別は、敵意が正当化されるか否かに、主として、かかっている。羨望対象の優位性が、不公平な、理に叶わない、違反から生じているのならば、この怒りは当然のこととされ、それは、憤慨 (resentment) と呼ばれるであろう (Rawls, 1971)。そうでないときが、悪意のある羨望である。この区別は、客観的な社会的事実にも照らしてなされる。この点に、感情概念に、認知や社会的規準を含めることの重要性が、浮き彫りにされている。だが、観察者からは、悪意のある羨望のなせるわざだと判断されても、羨望する人は、自らを、羨望ではなく、正義により憤慨しているのだと見なしている場合も出てくるであろう。

悪意のあるものにしろ、ないものにしろ、羨望は、社会的比較とともに始まる。人は、自分にとって重要な事柄で、より優れている他者の存在を容易に実感する。この時点で、自身と、自分の欠点に焦点を結べば、悪意のない羨望が抱かれ、運命の不公平を憤ることになるかもしれない。逆に、自分の欠点の原因として、羨望する相手の人物に焦点を結べば、敵意や憎しみに満ちた、悪意のある羨望が触発されるであろう。これは、自分は劣っているとは思いたくないがための、状況の防衛的評価のなせるわざである。

感情としての羨望概念は、一組の客観的に評価された反応を指す。羨望は、時間とともに展開する。多くの感情と同じく、それは、じっとしたままではない。著者は、羨望に関する感情

挿話のデータを分析し、羨望の一部として経験される、六つの感情を区別している（表1）。

①切望 (longing)。他者の所有している望ましい対象や資質に対して、強い切望が抱かれる。

②劣等感 (inferiority)。認知的焦点を自らの欠点に合わせるとき、劣等性が意識され、苦悩や悲哀、心配が醸成される。

③目標に向けられた憤慨 (agent-focused resentment)。他者の優位性を、不公平に帰すると、違反に対する怒りや憤慨、さらには憎しみへと、発展する。特定の個人や集団が、責任を負うべきだと見なされる。

④全般的な憤慨 (global resentment)。人生や運命の不公平に、焦点が合わせられると、全般的な怒りや憤慨が表出される。

⑤罪悪感 (guilt)。他者に向けられた怒りが、正当な根拠を持たないとき、罪を感じたり、恥ずかしいと思われる。このとき、啓蒙された羨望と呼ばれる。

⑥憧憬 (admiration)。他者の美質を尊く評価する。自己を向上させようとする。ただし、原型や定義には合致しない。

現実の羨望挿話には、種々の経験の一つ以上が含まれる。どんな経験が生じるかは、状況の解釈、局面の焦点合わせに左右される。例えば、他者と比較して、自分は劣弱な状態にあるが、それは、自らの属性のせいだと信じているとき、最も顕著な反応は、劣等感と、自己を向上させようとの動機づけである。不公平が認知されれば、怒りと憤慨の感情が優勢となる。

表1. 羨望の一部である感情経験

感情経験	記述
切望	他者が所有するものに対する切望。阻止された願望。
劣等感	自分の欠点に対する悲哀や苦悩、または、羨ましい人物に対する過度の劣等感。自分の地位に対する心配。羨ましい人物の所有物を獲得することの絶望感。
目標に向けられた憤慨	特定の人物や集団に対する憤慨。彼らの優位に対する不快。責任を取るべきだと思われる人々に対する怒りや憎しみ。
全般的な憤慨	情況または運命の不公平に対する憤慨。
罪悪感	悪意を抱くことの罪悪感。恨みが間違っているとの信念。 「啓蒙された悪意のある羨望」
憧憬	憧憬。対抗心。

4. 嫉妬

嫉妬は、パートナーとの重要な関係が、ライバルのせいで、喪失の脅威に曝されたとき、経験される感情である。だから、パートナーがライバルとの間に、類似の関係を始めない喪失は、嫉妬を生まない。パートナーの死亡や転居も、嫉妬にはつながらない。単に、拒絶された場合も、嫉妬だとは言われない。要するに、脅威は、ライバルのせいでの関係の喪失を含まなければならない。その喪失が、惧れだけなのか、現実のものなのか、過去の事実なのかは、この際、

問われない。

嫉妬の最も一般的な例は、恋愛関係 (romantic relationships) であるが、他の種類の関係でも、嫉妬は生じる。親をめぐるきょうだい間、人気者をめぐる友人間、ボスをめぐる部下間、教師をめぐる生徒間、においても、嫉妬は見受けられる。また、関係には、愛を含む必要はなく、ライバルも、人でなくても構わない。常に正しいのは、嫉妬は、三角形の関係 (a triangle of relations) を含むということである。三角形の第一の辺は、二人の人物、嫉妬する人とパートナーの関係を表し、第二辺は、パートナーとライバルの関係を表す。第三辺は、ライバルに対する、嫉妬する人の態度を表すのである。

このように、様々な関係やライバルが、嫉妬を喚起するとすれば、脅威とはいかなるものか、が問題になる。それ、嫉妬の脅威は、他者の注意を喪失することである (Tov-Ruach, 1980)。しかし、注意の喪失の全てが、嫉妬を生み出すのではない。嫉妬が生じるのは、形態形成的な注意 (formative attention) の喪失である。ここで、形態形成的な注意とは、人の自己概念の一部を支えている注意のことである。例えば、他者との関係が、自己像と深く係わり、利益を与えてくれる、また、その継続に値する資質を自分は持っているのだと思わせてくれるような場合、形態形成的である。そうだとすれば、この関係を喪失するという惧れは、人の自己 (self) にとって、痛烈に堪えるはずである。

だから、嫉妬の核心には、必要とされたいという欲求 (need to be needed) が、底流をなしている。他者との関係が、我々の自己のある局面を創造し、確証してくれるものだから、この欲求は安住の地を見出そうとする。この意味で、自己のある局面は、本質的に、対人的なものなのである。

我々は、自分のことを、人と一緒にいるのを楽しむとか、性的魅力に富むとか、見なしている。しかし、他者がいなければ、これらの概念は、意味をなさない。我々は、自分の、こうした局面を確証するためばかりでなく、創造するためにも、他者を必要とするのである。これらの、種々の、相互作用からなる安定した関係が、なによりも、自己規定の具体的な源泉なのである。こういった関係を喪失するという惧れは、それ故、取りも直さず、自己 (自我) を喪失するという惧れなのである。所有物の喪失ではない。なかでも、嫉妬の原型事例が恋愛や情事 (romantic love) にある、という事実は、我々の文化では、この種の関係によって支持される自己の局面が、どれほど重要であるかということを、如実に説明づけている。

ところで、嫉妬の経験を理解するアプローチに、二つある。一つは、嫉妬を、狭く定義づけ、ある種の感情経験に限定することである。これだと、凝縮された感情経験を指示することができるが、逆に、日常用語での嫉妬という言葉の広範囲な利用の一部しか、覆えないことになる。二つは、嫉妬を、広義に定義づけることである。こうすれば、全ての使用法が含まれるが、逆に、概念的な無規律さに陥ってしまう。そこでの解決法であるが、著者は、両方とも有効だと考える。嫉妬の狭義の定義は、概念的な明確さの故に、また、広義の定義は、嫉妬の感情挿話の中で生じる、実に様々な経験を理解するのに役に立つからである。

まずは、嫉妬を、単一の感情経験として、狭義に考えると、それは、形態形成的な注意を提

供する関係が、脅威に曝されたという知覚から生じる心配や不安 (anxious insecurity) である、と定義づけられる。この脅威を察知することによって、人は、関係の状態、及び、その関係によって支持された自己の局面について、不安を感じる。この不安を、他の不安から区別立てるものは、関係を喪失するという惧れと、自己 (自我) を喪失するという惧れが、同時に存在するということなのである。

このように、嫉妬を、狭く定義づけると、嫉妬に纏わる感情挿話の中に、他の感情経験も含まれることになる。嫉妬する人は、関係と自己 (自我) の喪失を惧れているのだが、同時に、怒り、心が傷つき、意気消沈し、むかむかし、うれしそうでさえある (Hupka, 1984)。これらの経験は、状況の他の局面へ、注意の焦点を移動したときに生じる、別個の感情群であると見なされよう。嫉妬という場合は、なによりも、喪失の惧れが強調される。この狭い意味が、中心的であり、嫉妬挿話において生じる、他の多くの感情反応の源泉なのである。

次に、嫉妬の経験を、感情経験の特徴ある布置として、広義に定義づけると、それは、様々な形態を取り得る。だが、関係への脅威の性質に基づいて、嫉妬は区別できる。一つは、疑惑に満ちた嫉妬 (suspicious jealousy) であり、これは、脅威が薄々感じられるとはいえ、性質が未だはっきりしない場合に生じる。惧れと不確実さを、優勢な反応とする。二つは、既成事実としての嫉妬 (fait accompli jealousy) であり、これは、脅威の事実が明瞭で、関係への影響も既に知られている場合に生じる。順次、詳細に見ていく (表 2)。

①疑念に満ちた嫉妬が生じるのは、パートナーが、関係において、形態形成的な種類の注意をライバルに移し変えるのかもしれないと、人が信じる場合である。この嫉妬を特徴づける経験は、心配と不安である。つまり、狭義の嫉妬、と言える。関係の重要さ、状態の不確かさ、自己についての不安、これらが、心配を醸成し、この心配 (不安) に駆られて、嫉妬する人は、惧れが根拠のあるものか否かを、見出そうと動機づけられる。そうすると、様々な認知的症候群が結果する。例えば、疑惑を持ったり、他の事柄に集中できなかったり、物思いに沈み込んだり、パートナーとライバルが楽しい関係を取り結んでいると空想したり、パートナーの不満の術策やほめかしに過度に敏感になったり、ということが生じる。これら認知的症候群は、不安の他の局面と同じ程度に、疑惑に満ちた嫉妬の経験の一部なのである。この際、嫉妬する人が、ライバルを見知っていることが少なくない。すると、当惑、警告、羨望、怒り、損傷、といった感情状態が生み出され、それらが、ライバルに向けられる。従って、疑惑に満ちた嫉妬こそは、嫉妬の原型 (prototype) なのである。

②既成事実としての嫉妬は、関係の状態に関する心配に限定されない。注意の焦点いかにによって、この種の嫉妬を特徴づける経験は異なる。例えば、焦点の置きどころが、関係の喪失にあれば、その経験は、悲哀であり、パートナーやライバルのよこしまな行為や裏切りがあれば、怒りなり損傷であり、自分の不適切さにあれば、意気消沈や憂慮であり、新しい社会的立場に対処することのストレスにあれば、心配であり、ライバルの優秀さにあれば、羨望であり、また、嫌悪や幸福や救済ですら生じ得るのである (Hupka, 1984)。さらには、以前のパートナーが新しい関係の中で、一見幸せそうなのに対する羨望も、この範疇に入る。

ただし、疑惑に満ちた嫉妬が、既成事実としての嫉妬と同様の経験を生じることもある。人々は、疑惑が真実か否か、疑念と確信の間を揺れ動くが、関係が現実には脅威に曝されていると最大限の確信を持って感じられる場合、その経験は、既成事実としての嫉妬の経験と酷似する。従って、嫉妬の二つの形態を区別立てるものは、脅威の客観的な性質ではなく、嫉妬する人の主観的な査定にあるのである。

著者らのデータでは、疑惑に満ちた嫉妬の事例は、顕著な疑惑と不信によって、また、恐れ、懸念、心配、心労によって、さらには、脅かされているという強いフィーリング、喪失の惧れによって、特徴づけられている。これに対して、既成事実としての嫉妬は、他者が持っているものへの切望、他者に抱く悪意に対する罪悪感、によって特徴づけられる。これらは、羨望の症候群であるが、この種の嫉妬の構成要素でもあるのである。

また、嫉妬の経験は、関係の進展に応じて、その顕在的な局面を異にする。関係以前には、願望、切望、困惑や罪悪感が優勢だ。直中には、喪失の惧れ、疑惑、不信のフィーリングが強烈だ。終了後には、切望が、再び浮上してくることであろう。

表 2. 疑惑に満ちた嫉妬と既成事実としての嫉妬 (筆者作表)

	疑惑に満ちた嫉妬	既成事実としての嫉妬
脅威の事実	薄々感じられるが、不明確	明瞭で、関係への影響も既知
主たる感情	心配と不安 (喪失の惧れ)	特定されない
症候群	疑惑と不信	悲哀
	他の事柄に集中できない	怒りや損傷
	物思いに没入	意気消沈や憂慮
	両者の関係を空想	心配
	パートナーの術策や暗示に過敏	羨望
		嫌悪
対ライバル感情		幸福や救済
	当惑	切望
	警告	罪悪感
	羨望	
	怒り	
	損傷	

5. 羨望と嫉妬の経験的区別

羨望と嫉妬の経験は、質的に区別される、と主張する向きも少なくない (e. g., Neu, 1980)。相違点を並列しよう。羨望が生じるのは、人が欠いているものを、他者が持っている場合であり、他方、嫉妬が係わるのは、人が持っている関係の喪失である。羨望が、特性や所有物に範囲を及ぼすのに対して、嫉妬は、他者との関係を問題にする。羨望では、ライバルの利得は、人をだしにする必要はないが、嫉妬では、人の関係喪失は、他者の利得となる。羨望の典型的な経験が、劣等感、切望、悪意であるのに対して、嫉妬のそれは、喪失の惧れ、疑惑、不信、怒り、である。羨望に伴う敵意は、社会的な制裁を受けないが、嫉妬に伴う敵意は、しばしば、

社会的に制裁さる。

このように違いが認められるのに、二つの感情は、たやすく合成されてしまう。類似点を列挙しよう。一つは、両方とも、敵意を含むことだ。もっとも、制裁の随伴は別である。二つは、両方とも、社会的比較から生じる自尊心の喪失を含むことだ。ただし、社会的比較をするのは、羨望では、羨望する人であるのに対して、嫉妬では、パートナーである。しかし、自尊心の喪失という結果は、酷似している。三つは、嫉妬と羨望が、しばしば、同時に生起することだ。羨望は、たびたび、嫉妬挿話の一部であるし、一方の感情が、他方を導く場合もある。

されば、これらの類似性があるとすれば、ごく普通の人々は、羨望と嫉妬を、余り区別していないのかもしれない。また、嫉妬する (jealous) という言葉は、妬ましいと羨ましい、いずれをも意味することが、一般的なのかもしれない。

この可能性を探るために、著者らは、一つの調査研究を実施した (Smith, Kim, & Parrott, 1988)。被験者は、羨望並びに嫉妬を強く感じる状況を、自由に記述するように求められた。この結果を、ジャッジが、羨望と嫉妬の伝統的な辞書定義に、合致するか否かを判定した。最初に、羨望の記述を求められると、大多数 (93%) が、羨望範疇の記述を行っていた。しかし、嫉妬の記述を始めに求められると、余り一貫性が保てなくなり、嫉妬範疇の記述は 3/4 (75%) に落ち込み、他は、羨望範疇の記述であった。従って、羨望という言葉は、かなり固定した意味を持っているようなのに対して、嫉妬という言葉、広範囲の意味内容を持つことができるようだ、と解釈できる。

また、始めに嫉妬の記述をすると、続いて求められた羨望の記述では、殆ど (91%) が、伝統的な羨望範疇の記述をしていた。これに対して、羨望記述の後に、嫉妬の記述が求められると、記述の相当数 (41%) が、羨望範疇のものであった。従って、嫉妬という用語は、それ以前に記述された羨望状況と、対照を際立たせようとは、必ずしもされないが、羨望のほうは、嫉妬状況が先行して記述されていると、それと対比させようと意識されるようである。

さらに、被験者の記述内容を分析すると、羨望という言葉は、人の個人的資質が、他者の域に達していない状況を指していた。これに対して、嫉妬のほうは、現実の、或いは望まれる関係 (通常、恋愛関係) が、他者によって脅かされている状況が述べられていた。

それぞれの状況で感得される感情も、実際の経験と理論的考察との間に、差異は認められなかった。即ち、羨望と嫉妬に典型的だとされてきた感情状態のリストを、被験者に呈示し、各々が、羨望もしくは嫉妬の特徴を、より示しているかを評定してもらった。すると、羨望は、向上動機、切望、劣等感、自己批判、の特徴を持ち、嫉妬は、疑惑、拒絶、怒り、損傷、喪失の恐れ、報復願望、の特徴を鮮烈に持つ、と判断されていた。心配や悲哀など多くの基本的感情は、弁別しきれないようであった。従って、人々は、羨望と嫉妬を区別立てて、それらを生み出す状況を考え、また、それらの特徴づける感情を捉えているようである。とはいえ、羨望や嫉妬の渦中で感じていると述べているものと、実際に感じているものとの間には、差異がありはしないだろうか。

こうした、羨望と嫉妬の現実経験の差異を、明らかにしようとした調査研究がある (Salovey

& Rodion, 1986)。結果を要約しよう。嫉妬は、羨望よりも遙かに強烈である。羨望と嫉妬は、基本的には、同じ仕方で経験されている。差異は、質的というよりも、量的なものである。そこには、羨望と嫉妬は、緊密に結びついたものだと言主張し得る、という前提が覗いている。

しかし、著者は、この前提は妥当ではないとして、発見結果について、幾つかの説明を提示する。一つは、羨望と嫉妬は異なる状況を指すが、両者は本質的に同種の経験を生み出す。二つは、羨望と嫉妬は、概ね、共同生起し、そのために、一方の経験的測度が、他方の存在により混同される可能性がある。三つは、嫉妬の強烈さが、両者の質の区別を不明瞭にするのかもしれない。そのために、大抵の測度において、嫉妬が羨望を無力にしていることであろう。さらに進んで、感情経験の質 (quality) に関する一般概念は、様々な感情経験の絶対的価値 (absolute values) と、余り密接な関連を持っていない。むしろ、諸成分の相対的な顕在性 (relative salience)、つまり、経験の感情的プロフィール (affective profile)、との間に関連を持っている、と主張するのである。

この最後の強調を証拠立てる調査研究を、著者らは実施している (Parrott & Smith, 1990)。羨望と嫉妬の共有の特徴と並んで、差異をも捉えようと企図した尺度を考案し、その尺度上に、被験者 (N=149) に、自らの経験を評定してもらっている。結果の処理には、二様の仕方がある。一つは、項目に対する、羨望と嫉妬の評定を、単純に比較することである。そうすれば、Salovey & Rodin (1986) の写しが得られよう。即ち、嫉妬は、羨望よりも、より強力な感情反応を生み出す (J=32/59, E=1/59)。

二つは、相対的顕在性、の考えを追究することである。項目に対する被験者の反応強度の指標は、個々の項目評定の値から、59項目の評定平均値を減じることによって得られた。もしも、同一の項目が、羨望と嫉妬の双方において顕在的であれば、変換値上で、両群間の差異はない

表 3. 羨望と嫉妬を区別立てる項目
(強度均一化の変換値に基づく)

羨望	嫉妬
劣等性を感じる	喪失を惧れる
自らを密かに恥ずかしく思う	脅威に曝される
人生が不公平だと憤る	拒絶される
欲求が阻止される	心配する
苦渋を味わう	疑惑を抱く
願望を抱く	裏切られる
他者の所有物を切望する	自分を疑う
私の感じていることを知れば	孤独である
他者は是認しない	確信が持てない
受け入れるのに困惑する	侮辱されたと感じる
他者に悪意を覚えることに	自分を意識する
罪悪感を感じる	不安である
道徳的な罪があると感じる	強烈な感情である
この感情を抱くのを始めは拒む	
自分を向上させようとする	

はずである。これに対して、もしも、差異が見出されるならば、羨望と嫉妬の間には、強度の違いに帰せられない、質的な差異が存在することになる。

結果は、後者を強く支持していた (26/59, $p < .10$)。羨望と嫉妬は、13項目ずつ、計26項目において、差異が見受けられた (表3)。羨望で一層顕在的なのは、劣等感、切望、憤慨、向上への動機づけであり、他者に悪意を覚えることの罪悪感や自分の感情が正当化されないという信念もまた、羨望の経験を特徴づけるものであった。これに対して、嫉妬で顕在的なのは、不信、喪失の恐れ、自己疑惑 (自信喪失)、心配という特徴であった。なによりも、この区別立ては、伝統的な定義に著しく対応している。

また、若干の洞察も引き出し得る。劣等感、自己疑惑 (自信喪失)、不安、の三つは、かなり類似した意味を持っているように見えるが、結果から、劣等感は羨望で顕在的であり、自己疑惑 (自信喪失) と不安は、嫉妬を特徴づけている。このことから、別種の自尊心、或いは、自尊心の低下に至る別種の道筋という、区別が、引き出せるかもしれない。羨望では、人の自己評価が、自分に対する不満をもたらし、嫉妬では、他者について熟考された評価が、安心や自信の欠如に通じるのである。

6. 注釈と論評

以上、筆者は、著者パロットの嫉妬と羨望の類型学を、可能な限り抑制的に記述してきた。これからは、注釈を交えながら、論評を加えるべき部分である。

まず、理論的考察の全般を評すれば、羨望を、嫉妬概念と併置することにより、対象とする対人関係の範囲が広域化し、ともすれば、男女のロマンティックな三角関係に矮小化されがちな嫉妬概念にも、社会性を一層付与するに至っている。定義づけも、より明確になっている。この点が、長所であろう。それに、感情挿話に関する実際のデータに裏打ちされているのは、なよりの強みである。

導入部分の、感情と感情経験に関する考察は、幾分、脆弱というか、割愛気味である。他に、感情一般の認知的理論の優れた考察があり (e. g. Frijda, 1987; Smith & Ellsworth, 1985; Ortony, et al., 1988), そちらに委譲した形となっている。特に、最後の研究者たちは、出来事に対する反応の一つとして、羨望や嫉妬を含めた、瞋恚感情 (resentment emotions) を取り上げ、詳細に、組織立てて、分析している。参考となるが、拙速に、この迷宮に立ち入るのは、やはり、賢明ではなからう。

まず、第一の、羨望の考察では、悪意のない羨望から、悪意のある羨望を解き放った後、羨望の一部として経験される感情を、明細に述べ立てている。羨望、劣等感、憤慨 (目標と全般)、罪悪感、憧憬、の六つに要約された感情経験の中に、従来の羨望概念の要素が入っていよう。

例えば、「羨望は、他者が所有するものを獲得したいという願望から生じる。他方、嫉妬は、既に所有しているものを喪失するのではないかという惧れに根ざしている。」(Foster, 1972, p. 168), と言われるごとくである。また、より強く、「悪意のある羨望の場合、人は、自分の水準またはそれ以下に、他者を引きずり下ろそうと望む。」(Neu, 1980, p. 434) と、指摘されても

いる。さらに、「羨望という複雑な感情は、悲哀に似た反応を含むのに加えて、怒りをもまた生み出す。」、「羨望感情は、ある程度、敵対的な特徴によって規定される。」(Smith, 1991, p. 80, 93), と述べられたりする。はたまた、これを、羨望は、しばしば憤慨を装う (Rawls, 1971) と、表現しても良いであろう。

わが国の文献での、例えば、「羨望とは、欲しいけれども手に入らないものへの欲望であるというよりも、そうしたものをもっている他者への讃美と憎しみ、劣等感を含む感情である。羨望はものへの欲望である以上に、他者にかかわる感情なのである。」(織田, 1991, p. 13) という指摘は、言語と文化の違いを越えても、概念上、著しい符号を示している。

ところで、別の研究者は「羨む人は他者を憎しみはしない。羨む人は優位にある他者を賞賛し、劣位の自己を卑下するだけである。」(作田, 1991, p. 5) と規定している。そこでは、羨望に伴う感情を、賞賛と自己卑下(劣等感)に代表させているようだが、やはり、憎しみへの転化の可能性を認めておいたほうが、一層重厚で、適切なのではないか。辞書の意味も、この点を裏打ちしている¹。我々は、手本から憎悪の対象への変転の事例と、割合、身近に接しているように思える。また、昨今の、アメリカの日本叩きなども、他者の優位性を違反や不公正に帰することから生じる怒りや憤慨であり、憎しみへと転じたものと、受けとめるのが、道理に合っているようである。

なお、冒頭に引用した小野小町に対する、後世の人々の感情は、正確には、嫉妬ではなく、羨望であろう。ただし、「小野小町…美人はとうぜん憧憬の対象となる。憧憬はしだいに羨望へと移り、羨望はやがて嫉妬に変質する。そして、嫉妬はついに憎悪にまで高ぶってゆく。」(森本, 1989, p. 26) という解釈の流れは、厳密さに欠けるが、耳当たりが良く、ごく自然に受容されるかもしれない。

次に、第二の、嫉妬の考察では、「嫉妬は、厳密には、詳細にわたって定義し得ない。」(White & Mullen, 1989, p. 5) という見解もある中で、著者は、パートナーとの重要な関係が、ライバルに取って替わられそうだという、喪失の脅威に曝されたときに経験される感情である、と明確に述べている。

この見解は、「嫉妬は、二つの基本的な成分を持つ。即ち、自負を害されたという感情と、正当な権利が侵害されたという感情である。」そして、「自らの所有物を喪失するかもしれない、と言う惧れ以上のものでは殆どない。」(Walster & Walster, 1977, p. 92, 93) との認識を、まさしく、受け継いでいるようだ。

しかも、嫉妬一般を、疑念に満ちた嫉妬と既成事実としての嫉妬に、二分割した点も、実態を一層分明なものにしている。

わが国の文献では、「妬む人は優位にある他者を憎み、害したいと思う」、特に、「嫉妬は、羨望と異なって、…攻撃性を伴う。」(作田, 1991, p. 6) という見解が示されているが、羨望概念との交絡が見受けられるようだ。筆者は、羨望にも攻撃性が秘められていると考える²。

また、別の研究者によって、「嫉妬と羨望は隣接しており、一部重なり合い、いずれもモデル＝ライバルへの讃美と憎しみの共存であることには変わりないとはいえ、基本的には区別が可

能な二つの感情である。」とした上で、従来の定義を整理し、「客体の…互換性が高いほど羨望に近づき、逆に唯一無二的なものであるほど、嫉妬に近くなる」(織田, 1991, p. 16), という見解が示されているのも役に立つ。続けて、羨望され、敵視の目に曝されるか否かは、財貨(地位, 人気などを含む)の獲得者が所属する集団の規模や凝集性, それに財貨の互換性の大小によるところが大きい, と述べられている。いずれも, 説得力があるところだ。この点は, 財貨の稀少性(scarcity of goods)の効果と言い換えても良いであろう。「財貨が稀少でなければ, 人は, 嫉妬を感じないであろう。」(Neu, 1980, p. 434)。

筆者としては, 対人関係の基軸が愛憎と支配服従であるとすれば, 後者の要素を, 概念規定の中に積極的に取り入れるべきだと思う。例えば, 嫉妬が喪失の恐れであり, 関係の喪失のみならず, 自己(自我)の喪失の恐れだとしたのは, 著者の慧眼であるが, 併せて, それに伴う影響力(influence)の喪失と自己愛の瓦解という局面を, 見逃してはならないであろう。従って, 単に, 所有(享受)物もしくは財貨(地位, 人気, 才能などを含む)を喪失するという惧れに, 留まるものでは当然にない。突っ込んだ考察が, 必要なところであろう。

さらに, 羨望と嫉妬は, 単独に発現する場合もあるが, 共生起し, 増幅相乗作用をたやすく引き起こす。なにしろ, 「二つの感情は, 概念上区別できるが, 混在していることがしばしばである。」(Clanton & Smith, 1977b, p. 6)。また, 「当人が体験する主観的感情として嫉妬と羨望は本質的区別がない。」(岸田, 1987, p. 204), とも言える。そうだとすれば, 一応の, 基本的な区別立ての後には, 嫉妬羨望もしくは羨望嫉妬として, 引っくり回してしまうのも, 事態に即し, 生産的であるのかもしれない³。

もっと, 話題を展開させて, 日本人論の領域に分けいる形で, 「日本人は自分が嫉妬深いことを知っているからこそ, 他者の嫉妬に対して極めて用心深くなり, 他者からの嫉妬による攻撃を受けないように, 先手を打って自己卑下のポーズを取るのである。…社会の価値規準というモデルに照らし合わせて, 優劣を競うにいたる。こうして, 嫉妬が同じ価値をめぐるって発生するので, 人々はたえず嫉妬の視線のもとで生きてゆかなければならない。そのうえにまた, 妬まれる人は, 別のコンテキストにおいては妬む人となる。…相互監視の圧力のもとで, 人々は嫉妬の誘因となる自己突出を相互に実質的にけん制し合う。つまり, 水準化の意味での平等化が進行していく。」(作田, 1991, p. 12), と推論を展開させていくのも, 嫉妬と羨望の混淆は別として, 甚だ有意義である。

確かに, 嫉妬や羨望は, 社会的に構成されたものであり, 従って, 文化ごとに差異が見られるはずだ。この点を明確に踏まえて, 主題に取り組んでいく必要がある。

加えて, 現代は, 断面の斬り方によって, 「嫉妬とはしゃぎの時代」(岸田, 1987)とも見なせるが, 「ポストモダンの時代」や社会でもある(今田, 1987)。そこでは, 満たされない状態を解消しようとする<欠乏動機>ではなく, 違いによって付加価値を創造しようとする<差異動機>が, とりわけ, 意味を帯びてくる。「差異化の欲望とは, 自分が相手よりも異なった存在, つまりすぐれた存在だということを当の相手に認めさせようとする欲望である。」(織田, 1991, p. 24)。

翻って、西欧の社会では、羨望は奨励され、経済や社会の成長を促進すると考えられてもいる (Schoeck, 1969)。この中に、当代の日本の社会を含めても、違和感は、それほどないように思われる。羨望は、いわば、「競争の軸」(competitive axis, Foster, 1972) なのである。その意味では、社会は羨望を必要悪だと見なしているのかもしれない。羨望は、自己の欲求や願望を覚醒させ、自己向上の動機にもなるからである。宣伝が、現代人の羨望を執拗に絶え間なく喚起し、従って、「これらの社会での威信は、単に、あるものを所有しているだけでなく、他者が持っていないものを所有していることで定まる。」(Salovey & Rothman, 1991, p. 282), のである。

こうした展開は、一層、社会文化学的な色彩を濃厚に帯び、嫉妬と羨望の研究は、益々、興味の尽きないところとなる。だが、今は、可能性の示唆に止め置くことにしたい。

最後に、この、緑色の目(嫉妬)と邪悪な目(羨望)は、いつ、いかなるところでも、生起する可能性をはらんでいる。いかにも、人間的であり、人間とともに、これからも行き続けることであろう。それだけに、なおさら、その心理学的な解明が望まれるところである。ひとまず、筆を擱く。

註

1. 三省堂『大辞林』と小学館『言泉』で、羨望・羨む・羨ましいを引き、要約する。羨望とは、他人が自分より恵まれていたり、優れているのを見て、自分もそうなりたいと願う。また、そうなれなくて、憎らしく思われる。自分のことを不満に思う、である。これに対して、嫉妬・妬む・妬ましいの辞書の意味を纏めると、嫉妬とは、愛する者の心が他に向くのを恨み憎むこと、やきもち、そねみ、また、自分より優れた者を羨んだり、妬んだりする気持ち、腹を立てる、悔しいと思う、である。
2. 作田と織田論文は、いずれも、ジラールの『欲望の現象学』に依拠しているが、前者は、古語辞典の、羨みや妬みなどの字義から出発しているのに対して、後者は、そうではないところ (envy and jealousy) に起点を置いており、これが、定義に関して、微妙な相違を生じさせている原因ではなからうか。
3. サロヴェイ (e.g., Salovey, 1991b; Salovey & Rodin, 1989) は、羨望を社会的比較過程の嫉妬と呼称し、社会的関係の嫉妬 (恋愛の嫉妬を含む) と識別している。勘考に値しよう。

引用文献

- Bernhard, K. F. (1986). *Jealousy: Its nature and treatment*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.
- Bingle, R. G., & Buunk, B. (1985). Jealousy and social behavior: A review of person, relationship, and situational determinants. In P. Shaver (Ed.), *Review of personality and social psychology* (Vol. 6, pp. 241–264). Beverly Hills, CA: Sage.
- Clanton, G., & Smith, L. G. (Eds.) (1977a). *Jealousy*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Clanton, G., & Smith, L. G. (Eds.) (1977b). Introduction: Keys to an understanding of jealousy. In Clanton, G., & Smith, L. G. (Eds.), *Jealousy* (pp. 1–11). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Cohen, B. (1986). *The Snow White syndrome: All about envy*. New York: Macmillan. (コーエン, 阿川佐知子訳 (1989). 『嫉妬』三笠書房)
- Foster, G. M. (1972). The anatomy of envy: A study in symbolic behavior. *Current Anthropology*, 13, 165–202.

- Friday, N. (1986). *Jealousy*. New York: Perigord Press.
- Frijda, N. (1987). *The emotions*. New York: Cambridge University Press.
- Girard, R. (1961). *Menconge romantique et verite romanesque*. Paris: Bernard Grasset. (ジラルール, 古田幸男訳 (1971). 『欲望の現象学』法政大学出版局)
- Hupka, R. B. (1984). Jealousy: Compound emotion or label for a particular situation? *Motivation and Emotion*, 8, 141–155.
- 今田 高俊(1987). 『モダンの脱構築』中央公論社
- 岸田 秀(1987). 『嫉妬の時代』飛鳥新社
- Mathes, E. W., Adams, H. E., & Davies, R. M. (1985). Jealousy: Loss of relationship rewards, loss of self-esteem, depression, anxiety, and anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1552–1561.
- 森本 哲郎(1989). 「嫉妬について——小野小町」『続 生き方の研究』(pp. 25–36) 新潮社
- 中里 浩明・田中 国夫 (1973). 「対人態度の感情構造に関する研究」『心理学研究』(Vol. 44, pp. 92–96).
- Neu, J. (1980). Jealous thoughts. In A.O. Rorty (Ed.), *Explaining emotions* (pp. 425–463). Berkeley: University California Press.
- 織田 年和(1991, 5). 「羨望と差異化」『思想の科学』(No. 140, pp. 13–24)
- 荻野 恒一(1983). 『嫉妬の構造』紀伊国屋書店
- Ortony, A., Clore, G. L., & Collins, A. (1988). *The cognitive structure of emotions*. New York: Cambridge University Press.
- Parrott, W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp. 3–30). New York: Guilford Press.
- Parrott, W. G. & Smith, R. H. (1990). *Distinguishing the experiences of envy and jealousy*. Manuscript submitted for publication. Cited in Parrott, W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp. 3–30). New York: Guilford Press.
- Rawls, J. (1971). *A theory of justice*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ロールズ, 矢島欽次監訳, (1979). 『正義論』紀伊国屋書店)
- 作田 啓一(1991, 5). 「羨望・嫉妬・憧憬」『思想の科学』(No. 140, pp. 4–12)
- Salovey, P. (Ed.), (1991a). *The psychology of jealousy and envy*. New York: Guilford Press.
- Salovey, P. (1991b). Social comparison processes in envy and jealousy. In J. Suls & T. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research* (pp. 261–285). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Salovey, P., & Rodin, J. (1984). Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 780–792.
- Salovey, P., & Rodin, J. (1986). The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1100–1112.
- Salovey, P., & Rodin, J. (1989). Envy and jealousy in close relationships. In C. Hendrick (Ed.), *Review of personality and social psychology* Vol. 10, pp. 221–246). Beverly Hills, CA: Sage.
- Salovey, P., & Rothman, A. (1991). Envy and jealousy: Self and society. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp. 271–286). New York: Guilford Press.
- Schoeck, H. (1969). *Envy: A theory of social behavior*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Silver, M., & Sabini, J. (1978). The perception of envy. *Social Psychology*, 41, 105–117.
- Smith, C. A., & Ellsworth, P. C. (1985). Patterns of cognitive appraisal in emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 813–838.
- Smith, R. H. (1991). Envy and the sense of injustice. In P. Salovey (Ed.), *The psychology of jealousy*

- and envy* (pp. 79–99). New York: Guilford Press.
- Smith, R. H., Kim, S. H., & Parrott, W.G. (1988). Envy and jealousy: Semantic problems and experiential distinctions, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 401–409.
- 詫摩 武俊(1975). 『嫉妬の心理学』 光文社
- Tov-Ruach, L. (1980). Jealousy, attention, and loss. In A. O. Rorty (Ed.), *Explaining emotions* (pp. 465–488). Berkeley: University California Press.
- Walster (Hatfield), E., & Walster G. W. (1977). The social psychology of jealousy. In G. Clanton & L. G. Smith (Eds.) *Jealousy* (pp. 91–99). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- White, G. L., & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: Guilford Press.

(原稿受理 1991年 8 月23日)